

文理解の方略の発達的研究

—言語獲得における言語普遍性と言語相対性—

東北大学 伊藤 武彦

1. 文理解の方略

人間は他の人の発話した文をどのような機構によって処理し理解するのであろうか。また、そのような個人の持つ文処理の機構は、どのような発達過程を経て獲得されるのであろうか。

発話された文の何を手掛りとして理解するかを「文理解の方略」と規定して、以下論を進めよう。文理解の手がかりを広くみても、言語的なもの他に非言語的なものも考えられる。たとえば、聞き手の持っているさまざまな知識、話し手と聞き手との社会的関係、談話が行なわれている場所・時期・状況などの諸要因が考えられる。また、身ぶり動作や指さし、視線の方向等の身体的表現が手がかりになる場合もある。発話した時の語調の強さやイントネーション等のパラ言語的要素も使用されるであろう。人間のコミュニケーション活動において、以上のような非言語的、パラ言語的側面の果す役割は、Oksaar(1977)が指摘するように重要である。一方、文の文法的構造や語彙等の言語的手がかりの重要性も言うまでもないことであろう。社会的協約性を持つ記号体系である言語によってメッセージが正確に伝達されるためには、その体系の約束ごとが話し手と聞き手に共有されていなければならない。この約束ごと、すなわち言語的知識の獲得の途上で、子どもがさまざまな手がかりを使用して言語活動をおこなっていることが注目されてきている。

子どもが何を手がかりに大人の発話する文を理解していくかについて、統語論的問題との関係で体系的な説明を試み、「知覚の方略」概念を提起したのは、Bever(1970)であった。とりわけ単文理解の獲得過程において興味深いのは、彼が「順次のラベリング方略」または「方略D」と呼ぶ、語順を手がかりにして単文中の格関係を決定する方略である。本方略では、「表層構造における潜在的内的単位の中にある、どのような名詞-動詞-名詞(NVN)の語順で

も『行為主-行為-対象』と解釈する。この方略の存在は、子どもがある年齢段階において受動文を理解する際に、最初の名詞(すなわち主語)を「行為主」と誤解し、動詞の後の名詞(すなわち動作主)を行為の対象であると解釈してしまう事実によって何度も確かめられている(Bever, 1970; Maratsos, 1974; Bridges, 1980)。この方略は第一名語=動作主(行為主)とみなす方略であり、以下「第一名詞方略」と呼ぶことにする。子どもは、受動変形によって表層上に現われた標識(be動詞、-ed, by等の前置詞)に気づかず、または気づいていたとしても、動詞の前の第一番目の名詞が動作の主体を示すのだということの方が判断の基準になったため、正しく文処理できなかったのである。このような第一名詞方略は英語児のみならずフランス語児にも存在する(Sindaire & Bronkard, 1972)。

日本語児においては、文頭の名詞に格助詞「が」がついていると、受動文においても「行為者」と誤って判断する時期があることを、Sano(1976)やHakuta(1977, 1982)が確かめている。

以上のように、語順の要因が、子どもの文理解において重要な手がかりとなることは一般に認められるにしても、英語のように統語論上で語順が主な役割を占める言語と、例えば日本語のように語順よりも助詞が文中の格関係を主に決定するような言語との間では、その重要性が異ってくる。そこで、各国の子どもたちの文理解の発達を、用いる方略の変化ということに焦点を合わせて展望してみよう。

2. 能動文・受動文理解における方略

まず、能動文・受動文の処理における子どもの方略使用について、各言語別にみてみよう。

(1) 英語児

Bever(1970)は、SVOから成る能動文を

SとOとの関係について以下の三種を考え、2歳から5歳までの男女児の文理解を調べた。

a. The cow kisses the horse. (可逆文: 主語と目的語を入れ替えても文が成立する)

b. The mother pats the dog. (適合文: 主客を入れ替えると意味的に不適合になる)

c. The dog pats the moter. (不適合文: 文のあらかず意味関係が非現実的である)

2歳児から3歳児にかけては不適合文の成績が低い。4～5歳児では高くなっている。2～3歳児ではNVN = SVOと解釈する第一名詞方略よりも、動作主になりやすい属性を持つ名詞を主語とみなす意味方略が優位であり、語順による文処理は4～5歳の時期で意味方略より強力になる。そこで可逆文の能動文と受動文について同じ実験を行なうと、2歳前半では能動、受動の成績は変わらないが、2歳後半～3歳児では受動文の正答率が大きく低下する。これは第一名詞を行為主として選択したためであろう。4歳後半から5才になるとどちらの態でも正答率が高くなる。NVN = SVO^注という単純な第一名詞方略から抜け出して、態を標示する文の変形に気付き、大人と同じ方略を使用するのである。

Maratsos (1974) は、3～4歳児に受動態の可逆文を演示させることにより、第一名詞方略の存在を確かめた。

Slobin (1966) は、6～12歳の子どもと大人とに絵を見せて、それに対する真または偽の描写を、能動文、受動文、否定文と受動否定文とで与え、真偽を判断させ、その反応潜時を比較した。その結果は、子どもも大人も、可逆文の場合には受動文の理解は能動文より時間がかかったが、非可逆文(すなわち適合文と不適合文)の場合にはこの違いがみられなかった。したがって、意味的な手がかりによる文理解の方略(=意味方略)は能動・受動の態の区別という統語的な方略が獲得された後にも、ひき続いて文処理の有効な手段として働いていることが示された。

以上の英語児の能動・受動文理解に関する諸研究は、方略の使用の変化という観点から、次のようにまとめることができよう。

①まず、意味整合文では、正しい動作主を選択するが、不整合文では意味的に動作主になりやすい目的語を、動作主として誤って選択し語順を無視してしまうという、意味方略優位の時期がある(幼児期前期)。第一名詞方略も存在するけれど、語彙の意味の方が、語の位置よりも判断の決め手になりやすいのである。

②次に、NVN = SVOと解釈して語順を手かかりとする第一名詞方略が意味方略を制して優位になる時期が訪れる(幼児期後期)。子どもは語彙の意味の手がかりがない可逆文においてのみならず、意味の手掛りがかえって第一名詞方略を妨げる働きを持つ不適合文においても第一名詞を動作主として選ぶのである。しかし、受動文においては第一名詞は主語であるが、意味的には動作の目的格として解釈されるべきことを理解していないので正答率が激減する。子どもの中には、いわば、次の三段論法が成り立っているであろう。

第一名詞 = 主語……………(1)

主語 = 動作主(行為者)……………(2)

ゆえに

第一名詞 = 動作主……………(3)

(1)は、英語における単文では、真の命題である。しかし、受動文の場合には(2)は誤った命題となり、(3)の結論を偽へと導くのである。

③次に、子どもは態の変形に気づくようになる。もしも動詞句が「規準型」すなわち能動態ならば第一名詞は動作主であるが、もしも動詞句が受動態の場合には、語順による判断ができなくなってしまう。受動文の正答率は前段階より回復してチャンスレベルに近づくのである。第一名詞方略という誤った方針は廃棄されたが、受動変形の文法的理解が達成されていない段階である。

④最後に、受動文を統語的に正しく理解する時期に到達する。大人と同じような統語的判断が可能なることから、この時期を統語方略が優位な段階と位置づけたい。

(2) 日本語児

英語の場合には、文中の格関係は、主に語順によって標示されるのに対して、日本語は、助詞という後置詞があり、とりわけ格助詞が格の

決定に重要な役割を果す。日本語の能動文と受動文の理解を研究したものと、Sano (1977), Hakuta (1977, 1982), 八木 (1980), 鈴木 (1977) の研究がある。

Sano は、3歳半から6歳半の子どもを対象に文理解の実験を行ない、能動文においてSOVの語順(～が～を～した)の方がOSVの語順(～を～が～した)よりも正しく理解されやすいことを示した。鈴木の本理解に関する実験の結果は、受動文理解が能動文理解より遅れ、第一名詞方略(鈴木は『語順方略』と呼んでいる)の存在を明らかにした。Hakutaの研究もこれらの結果を支持している。可逆的な能動文の理解を2:3～6:2の日本語児に対して演示法で実験したところ、SOV能動文はOSV能動文よりも理解されやすく、また能動文理解が受動文理解よりも容易であるとの結果を得た。能動文理解は3歳以前に獲得されるが、受動文の正しい理解は5歳以降である。興味深いのは、4歳頃の子どもが、SOV受動文(～が～に～された)を第一名詞=動作主とした誤りが高率であったことである。このような結果はなぜ生じたのであろうか。それを明らかにするために、日本語児の本理解の方略の発達の变化を英語児のそれと比較してみよう。

OSV能動文が年少の子どもにとってむずかしい課題であり、答えがチャンスレベルにあったことは、Beverの第一名詞方略が英語児に使用されても、日本語児には単純に適用されないことを示している。同時に、助詞のみならず語順の要因も、幼児の日本語理解にとって重要であることを示す。日本語児にとって理解が容易なSOV能動文すなわち、「～が～を～する」という文は、日本語の規準的形式である。したがって規準的文型が子どもに最もよく理解されやすいということは日英両言語とも共通した特徴である。そしてアメリカの子どもに、受動文を規準的文型と同じ手掛りで文処理をする(第一名詞方略を適用する)段階があるのと同じように、日本の子どもには、

第一名詞+「が」=動作主

という方略によって文処理をする段階があるのである。その結果、SOV受動文(～が～に～

された)の正答率が著しく低かった。この文型では、最初の名詞句は「名詞+「が」」であり文の主格である。

したがって、日英両語の本理解の発達過程で確かめられたことは、規準型以外の文型を規準型で解釈する方法によって誤って格関係を取り違える時期があることである。この時期を経てから受動変形を正しく理解する時期が訪れるのである。

ところで、すべての文をこの規準型に見なしに解釈するステレオタイプ的方略と、第一名詞方略や助詞を手掛りとした方略(助詞方略)との関係を明確にする必要がある。そのために、次に、様々な語順での能動文理解についての研究を展望してみよう。

3. 言語普遍性と語順の問題

Greenberg (1963) の言語普遍性の研究によれば、世界中の言語の規準的語順を調査した結果、SOVやSVOやVSOの語順が圧倒的に多く、OがSの前に来る言語はごくわずかな数しかなかった。そこで「名詞の主語と目的語を持つ平叙文において支配的な語順は、ほとんどいつも主語(S)が目的語(O)に先行する」ことを類型論による言語普遍性の一つだとしている。若干の例外(たとえばタガログ語)もみられるこの「普遍性」は言語学的なものであるが、実際の本理解においても、SがOに先行するという解釈の普遍性が発見されるのであろうか。

この疑問に対しては、格助詞などの格標識case markerを文中から外した無標文の研究が参考になる。

無標文の理解では、意味方略が最も頻繁に適用されるが、名詞の意味の手掛りが中立的な可逆文においては、ある時期(4～5歳頃)に第一名詞を第二名詞よりも動作主とみなす傾向がフランス語(Sinclair & Bronckart, 1972; Sinclaire, 1973)、英語(Tager-Flusberg, 1978 [Hakuta, 1979による]; Bates et al, 1981)、イタリア語(Bates et al, 1981); Slobin & Bever, 1980)、セルボ=クロアチア語(Slobin & Bever, 1980)、ヘブライ語(Frankle et al, 1980)等のSVO言語に現

われ、いずれもNVN = SVOとする傾向がVNN = VSOおよびNNV = SOVとする傾向よりも顕著であった。第一名詞方略は規準的文型のときに最もよく使用されるのである。

日本語においても、無標文に対して第一名詞方略を使用することが確認されている(Hayashibe, 1975; Hakuta, 1982)。また、有標文や有標・無標を混合した能動文の理解において、助詞の理解に到る前に第一名詞=動作主とする時期があることが明らかにされた。(Hayashibe, 1975; 林部, 1976; 岩立, 1980)。このように、助詞などの格標識がない場合に文理解の手がかりとして、第一名詞=動作主とする現象は日本語以外にも存在する。屈折や冠詞による格標示が名詞の性によって中立的になる場合があるヘブライ語(Frankel et al., 1980)やセルボクロアチア語(Slobin & Bever, 1980)やドイツ語(Mills, 1979〔Slobin & Bever, 1980による〕)においても、中立的な名詞2個と動詞によるNVN型の文はSVOと解釈された。

しかも、一方の名詞のみ格標示がある非規準的語順の2文型すなわちNVS型とOVN型を比較すると、三言語に共通してNVS型がOVN型よりも理解困難な傾向が見出された。これは第一名詞が有標であり目的格が標示されていると、第一名詞を動作主とする傾向が妨害され適用されなくなってしまうことの現われである。

4. Batesらの研究 - 英語とイタリア語 -

さて、ここでBates et al (1981, 1982)の研究を紹介しよう。彼女らの研究の優位性は、文理解の手掛りとなる諸要因を同時に比較検討できる点にある。

Bates et al, (1982)ではイタリア語と英語を母国語とする成人を対象として、NVN, VNN, NNVの3水準の語順の要因と、有生-有生(AA)・有生-無生(AI)・無生-有生(IA)の3水準の意味の要因、第一名詞強勢(ストレス)、第二名詞強勢・強勢無の3水準の強勢の要因、旧情報-新情報、新情報-旧情報、新情報-新情報の3水準の提題の要因からなる単文刺激の提示後、主語(または目的語)はど

ちらかを答えさせた。その結果によれば、イタリア人は主に名詞の意味を手掛りにして有生名詞を主語に選んだ。しかしNVN語順ではその傾向が少し弱まり、第一名詞を主語とする傾向があった。一方、アメリカ人は、意味の要因が少ししか働かず、主語(または目的語)選択の基準となったのは、ほとんど語順の要因であった。彼らの反応は単純な第一名詞方略ではなく、以下のような統語的な語順の手掛りによるものであった。

NVN ⇒ SVO

例: The dog kisses the cat. ⇒ The dogが主語

NNV ⇒ OSV

例: The dog the cat kisses.

⇒ The cat kisses the dogと解釈

VNN ⇒ VOS

例: Kisses the dog the cat.

⇒ The cat kisses the dogと解釈

NVNの場合は第一名詞=主語だが、NNVとVNNの場合には第二名詞が主語と判断されたのである。このような方略を「統語方略」と呼ぼう。

この両言語間の結果の違いは、英語の動作主と目的語を持つ肯定平叙文ではSVO唯一の語順しか認められないが、イタリア語の場合には3つの語順(NVN, VNN, NNV)が可能であり、格の決定は、意味的な要因の他に強勢などの非統語的手がかりによって決まる。すなわち、英語においては語順の制約は強制的であるが、イタリア語は語順が自由である。また、英語においては語順が唯一の統語的手掛りになっているのにひきかえ、イタリア語では語順が統語上果す役割は小さい。

語順と意味と強勢の三要因に絞って2歳半~5歳半の子どもを対象とした実験の結果を見てみよう(Bates et al., 1981)。

英語児は意味の要因よりも語順の要因により影響を受けた反応をおこした。この傾向が著しいのはNVN = SVOとする場合であり、VNNやNNVの場合には、チャンスレベルに近い反応が多く、大人のように第二名詞を動作主とする傾向はなかった。一方、イタリア語児は

主に名詞の意味による意味方略を適用し、有生名詞を動作主とする傾向にあり、語順の3水準間の差は小さい。しかし4歳半～5歳半の時期に、全語順にわたって第一名詞方略が出現した。

私が「語順方略」という語を避けて「第一名詞方略」という語を使ってきたのは、この研究にあらわれた、アメリカ人幼児と大人との文処理の方略の違いを明示しなかったためである。すなわち、大人の「語順方略」は英語の「統語方略であるのに対し、英語児の「語順方略」は文頭の第一名詞を動作主と解釈する方略でありイタリア語児にも共通に見られたのである。

イタリア語児の第一名詞方略と英語児のそれとは、語順の要因によって出現の仕方が異なる。英語児がNVNの文型にのみ、この方略を適用しているのに対し、イタリア語児は3文型すべてに適用している。英語児は規準的語順と非規準的語順とを弁別し、前者にのみ第一名詞方略を適用しているのである。

5. 第一名詞方略のない言語—トルコ語—

これまで見てきた限りでは、第一名詞方略は、適用の仕方が語順によって選択的であるかどうかの違いはみられたにせよ、諸言語を獲得する途上に必ず出現していた。しかし、第一名詞方略が出現しない言語がある。

それはトルコ語である。

Slobin & Bever (1980) および Slobin (1981) によれば、トルコ語児の格関係の理解は他の言語の場合よりも早期に達成され(2歳以前)、SO型(SOV, SVO, VSO)型とOS型(OSV, OVS, VOS)との正答率にほとんど差がない。

トルコ語では、直接目的語の標示が接尾辞によって行なわれ、語順は全く自由である。目的格接尾辞は目的語に強制的・規則的に付加され格標示が明確なため、上記の6つの語順のいずれもが文法的であるという、語順に全く統語的・手掛りのない言語である。

トルコ語と英語は、格標示が単一の手段により、強制的で規則的であるという共通点を持つのに、前者の獲得が後者よりも早期に達成されるのは、接尾辞 v. s. 語順という格標示のシステムの違いであろう。接尾辞は、それ自身単一

で名詞(語幹)の格を示すいわば単独の手がかりであるのに対し、語順は、単語と単語の位置(実際の話しコトバにおいては時間的順序)の関係から判断する関係の手がかりであり、聞き手により多くの処理の手続きを必要とさせるのであろう。

日本語の助詞も「単独の手掛り」であるのになぜトルコ語の文理解よりも獲得が遅く、また非規準的語順でとりわけ理解困難となるのはなぜであろうか。

Slobin & Bever (1980) はその理由として、①目的格の格助詞が話しコトバでは省略可能であり、②目的語が文頭に来る場合は、格助詞「を」が提題の係助詞「は」に代替されることがある。すなわち、トルコ語ほど規則的・強制的な手掛りになっていないことを挙げている。

6. まとめ

当初、第一名詞方略は言語の違いをこえて幼児の言語獲得途上にあらわれるものと仮定されていたが、Slobin & Bever (1980) のトルコ語児のデータはその反証となった。また、意味方略たとえば生物が無生物よりも動作主として選択されやすいことは、言語の違いにかかわらないと考えられがちであるが、アメリカ人は幼児においても(Bates et al. 1981)大人においても(Bates et al. 1982)その傾向は見られなかった。トルコ語では格標識(接尾辞)が明瞭であり、英語では無生物主語が一般的であるという各々の言語の構造的性質が文理解の方略の選択を決定する要因となっている。文理解の方略の選択が認知的な過程であるとするならば、特定の言語の構造が特定の認知や思考の様式を決定するとするSapir-Whorf 仮説を支持することになる。しかし、第一名詞方略や意味方略が多様な言語において存在することも、われわれはこれまでにみている。

一方に認知の普遍性と関連する言語獲得の普遍性が存在し、もう一方では言語の構造上の差異に基く、言語獲得の相対性・独自性が存在する。両者の統一的把握は今後の言語獲得研究の上での根本問題である。解明のためには、各別別言語における言語獲得研究とともに交差言語

的または対照言語的な方法による複数の言語の発達の比較研究が必要である。

注

等号の左辺は刺激文の表層的語順を品詞名で表記し、右辺は被験者によって解釈された意味関係を文法的カテゴリー（S=主語、V=動詞、O=目的語）によって表記した。本来、文法的カテゴリーで意味関係を記述することは厳密に言えば不適切であり、「動作主」「動作」「対象」等の用語を使用すべきである。しかし本論文では、表記上の煩雑さを避けるため、能動文においてはあえてS、V、Oで動作主、動作、対象を表わすことにした。

REFERENCES

- Bates, E., McNew, S., MacWhinney, B., Devescovi, A., G Smith, S. Functional constraints on sentence processing : a cross-linguistic study. Cognition, 1982, 11, 245-299.
- Bates, E., MacWhinney, B., G Volterra, V. A cross-linguistic study of the development of sentence interpretation strategies. Paper presented at the biennial meeting of the Society for Research in Child Development, Boston, April 1981.
- Bever, T. The cognitive basis for linguistic structures. In J. R. Hayes (Ed.), Cognition and the development of language. New York : Wiley, 1970, 279-352.
- Bridges, A. SVO comprehension strategies reconsidered: the evidence of individual patterns of response Journal of Child Language, 1980, 7, 89-104.
- Frankel, D., Amir, M., Frenkel, E., G Arbel, T. A developmental study of the role of word order in comprehending Hebrew. Journal of Experimental Child Psychology, 1980, 29, 23-35.
- Greenberg, J. H. Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements. In J. H. Greenberg (Ed.), Universals of language. Cambridge, Massachusetts : M. I. T. Press, 1963.
- Hakuta, K. Word order and particles in the acquisition of Japanese. Papers and Reports on Child Language Development, Department of Linguistics, Stanford University, 1977, No 3, 110-117.
- Hakuta, K. Interaction between particles and word order in the comprehension and production of simple sentences in Japanese children. Developmental Psychology, 1982, 8, 62-76.
- Hayasibe, H. Word order and particles : a developmental study in Japanese. Descriptive and Applied Linguistics, (ICU), 1975, 8, 1-18.
- 林部英雄 知覚のストラテジーの実験的研究。村井潤一他(編) ことばの発達とその障害。第一法規, 1976, 99-108.
- 岩立志津夫 日本語における語順, 格ストラテジーについて, 心理学研究, 51, 1980. 233-240.
- Maratsos, M. Children who get worse at understanding the passive : a replication of Bever. Journal of psycholinguistic Research, 1974, 3, 65-74.
- オクサール, E 1977 在間進訳(1980) 言語の習得, 大修館書店
- Sano, K. An experimental study on the acquisition of Japanese simple sentences and cleft sentences. Descriptive and Applied Linguistics, 10, 213-233. 1976.
- Sinclair-de Zwart, H. Language acquisition and cognitive development. In T. E. Moore (Ed.), Cognitive development and the acquisition of language. New York : Academic Press, Inc., 1973, 9-25.
- Sinclair, H., G Bronckart, J. P. S. V. O. a linguistic universal ? : a study in developmental psycholinguistics. Journal

- of Experimental Child Psychology, 1972, 14, 329-348.
- Slobin, D. I. Grammatical transformations and sentence comprehension in child and adulthood. Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior, 5, 219-227. 1966.
- Slobin, D. I. Universal and particular in the acquisition of language. In L. R. Gleitman & G. E. Wanner (Eds.), Language acquisition: state of the art. Cambridge: Cambridge University Press, 1981.
- Slobin, D. I., G. Bever, T. G. Children use canonical sentence schemas: a cross-linguistic study of word order and inflections. Unpublished paper, December 1980.
- 鈴木情一 日本の幼児における語順方略, 教育心理学研究, 25, 1977, 200-205.
- 八木みどり 就学前児の文理解手掛かりの発達, 東京学芸大学特殊教育学科1980年度卒業論文抄録, 1980.